

特集

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、教育企画室の委託を受け、2008年度から卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。2009年度の調査は、2010年3月に卒業生2,983名を対象として実施され、回収率は約60%であった。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、調査の実施にあたっては調査委員会を組織した。関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

本調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に、東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善に活用することとなっている。本報告書は、このうち、全体の速報を示すものであり、今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は2回目の試みであり、回収率は上昇しているものの、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。本報告書に関しても、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と学生諸君の調査への協力をお願いしたい。

2011年5月

大学総合教育研究センター長

吉見俊哉

調査実施組織（2009年度）

大瀧友里奈 大学総合教育研究センター・特任助教 ○大多和直樹 大学総合教育研究センター・助教
岡本 和夫 大学総合教育研究センター長 ○小林 雅之 大学総合教育研究センター・教授
藤原 毅夫 大学総合教育研究センター・特任教授 山本 泰 大学院総合文化研究科・教授
○劉 文君 大学総合教育研究センター・特任研究員 (五十音順 ○は、本報告書執筆者)

実施方法

- アンケート送付日 : 2010年3月25日(卒業式の日)
- 卒業生数 : 2,983票
- 回答数 : 1,781票
- 回収率 : 59.7%(回収率は、回収数/卒業生数で計算した)

※学部(各学科)が、卒業式後の書類配付時に調査票を配付し、以下のAおよびBの方法で回答・回収した。

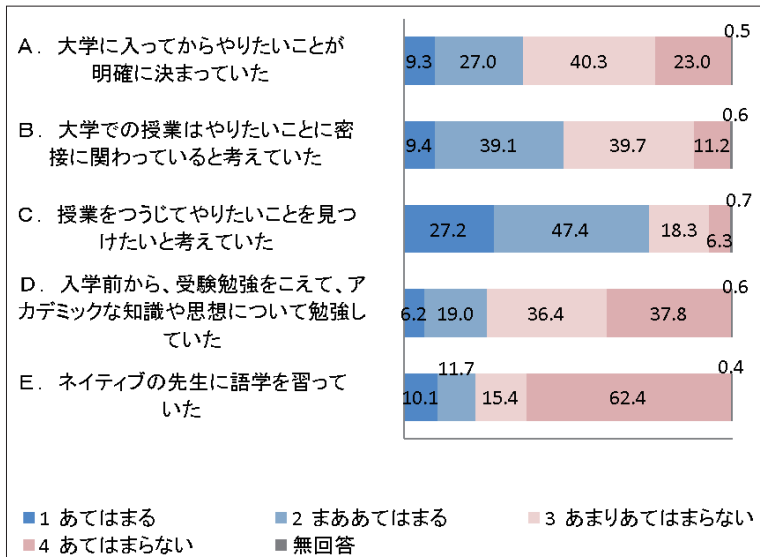
- A. 自記による回答後、各学部が回収(法、文、理、農、経済、薬、工)
- B. 自記による回答後、大学総合教育研究センターに郵送(医、教育、教養)

「入学時にやりたいことが明確に決まっていた」：約 40%

「入学前からアカデミックな知識・思想について勉強していた」は約 4 分の 1

Q. 入学時の様子についてお聞きします。

つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

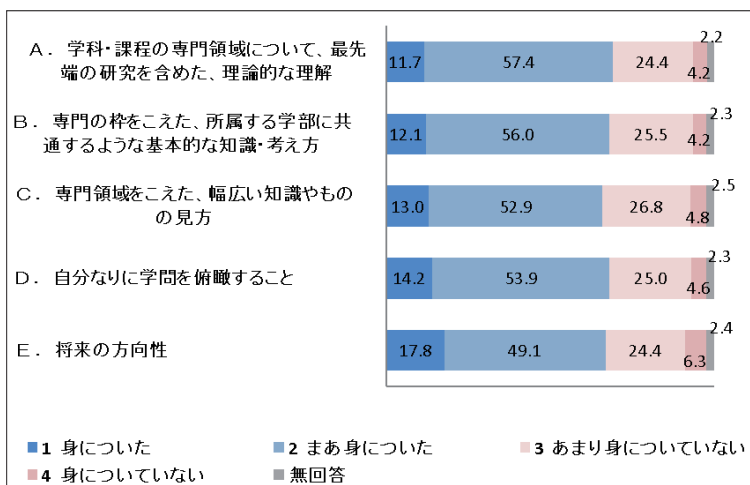


「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」に「あてはまる」「まああてはまる」と回答した学生は、36.3%となる。過半数が明確に決まっていないことになるが、そのかわりに、授業への関心は高く「C. 授業をつうじてやりたいことを見つけたいと考えていた」という学生は「あてはまる」と「まああてはまる」をあわせると74.6%にのぼる。

一方、入学前の準備（レディネス）を見てみると「D. 入学前から…アカデミックな知識や思想について勉強していた」は、25.2%にとどまる。

本学の教育をつうじて、知識や考え方は「まあ身についた」まで含めれば約 70%だが、「身についた」のみでは 20%以下にすぎない

Q. あなたは、東京大学の教育をつうじて、以下のような点を身につけたと思いますか。



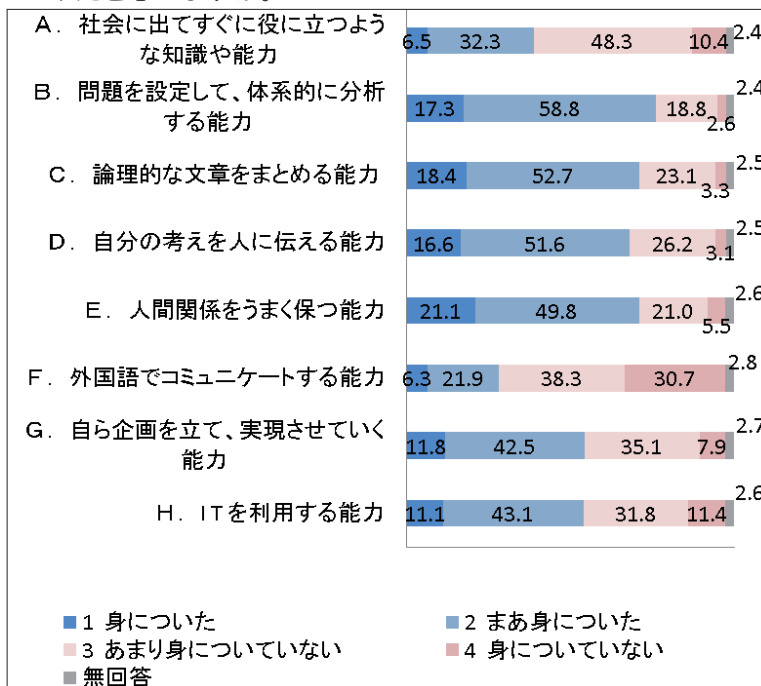
「A. 専門領域の理解」、「B. 学部共通の基本的知識・考え方」、「C. 幅広い知識や見方」、そして、「D. 学問の俯瞰」の各項目について、本学の教育をつうじて、「身についた」+「まあ身についた」と回答した学生は70%弱にのぼった。ただし、各項目において「身についた」だけをみると、15%以下の値にとどまっている。「身についた」と自信をもって回答できる学生は少ないということだろう。

「E. 将来の方向性」についてもほぼ同じ傾向にあるが、「身についた」が17.8%となり、上記4項目よりも若干高くなっている。

汎用性の高い能力は4分の3の学生が身につけているが

実用性の高い能力はあまり身につけていないと回答

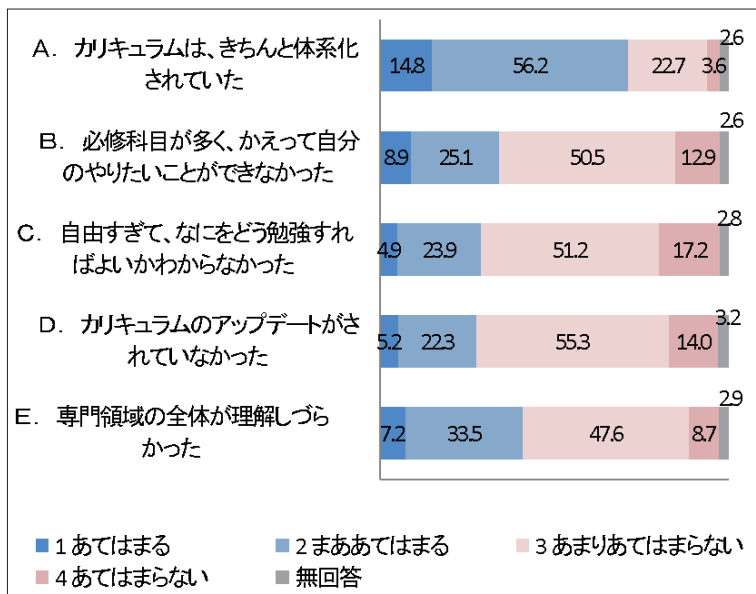
Q. あなたは、大学時代をつうじて、以下のような点を身につけたと思いますか。



大学時代をつうじて、身につけた能力としてあげられているのは、「B. 問題を設定して体系的に分析する能力」「C. 論理的な文章をまとめる能力」「D. 自分の考えを人に伝える能力」「E. 人間関係をうまく保つ能力」で、いずれも「身についた」と「まあ身についた」をあわせて70%前後の学生が身についたとしている。これに対して、あまり「身についた」と評価していないのは、「F. 外国語でコミュニケーションする能力」で、身についたとする学生は28.2%に過ぎず、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」も38.8%の学生が身についたとしているに過ぎない。さらに、「G. 自ら企画を立て、実現させていく能力」「H. ITを利用する能力」についても、身についたと回答している学生は、54.3%と54.2%となっている。

カリキュラムについては、肯定的な回答が多いが、約3分の1の学生は評価していない。特に「専門領域の全体が理解しづらかった」という学生は約40%

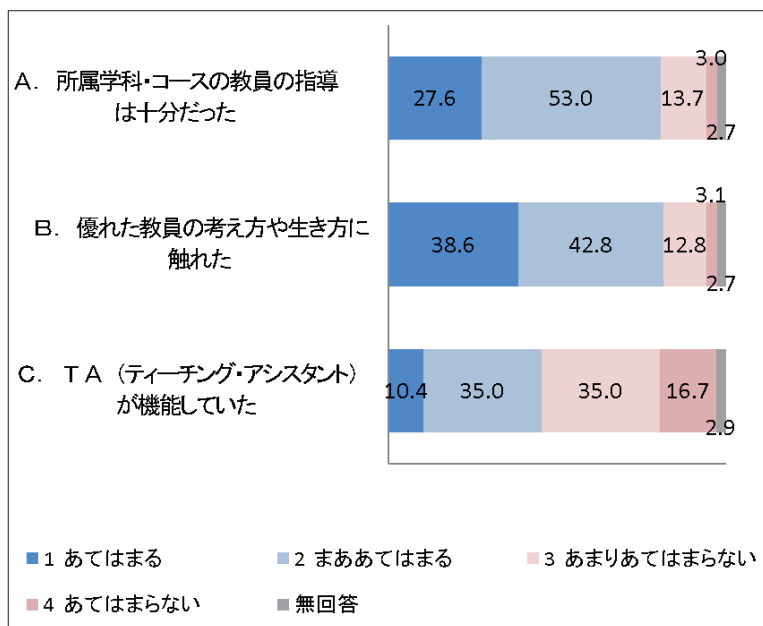
Q. 専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



専門学部・学科のカリキュラムについて、「A. きちんと体系化されていた」と評価する学生は、「あてはまる」と「まああてはまる」をあわせて71.0%で、「B. 必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった」「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」「D. カリキュラムのアップデートがされていなかった」という否定的な項目について、「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」という回答は63.4%、68.4%、69.3%である。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」に「あてはまる」と「まああてはまる」という学生は40.7%とやや多くなっている。

「教員の指導は十分」「優れた教員の考え方・生き方に触れた」:80%にのぼる

Q. 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

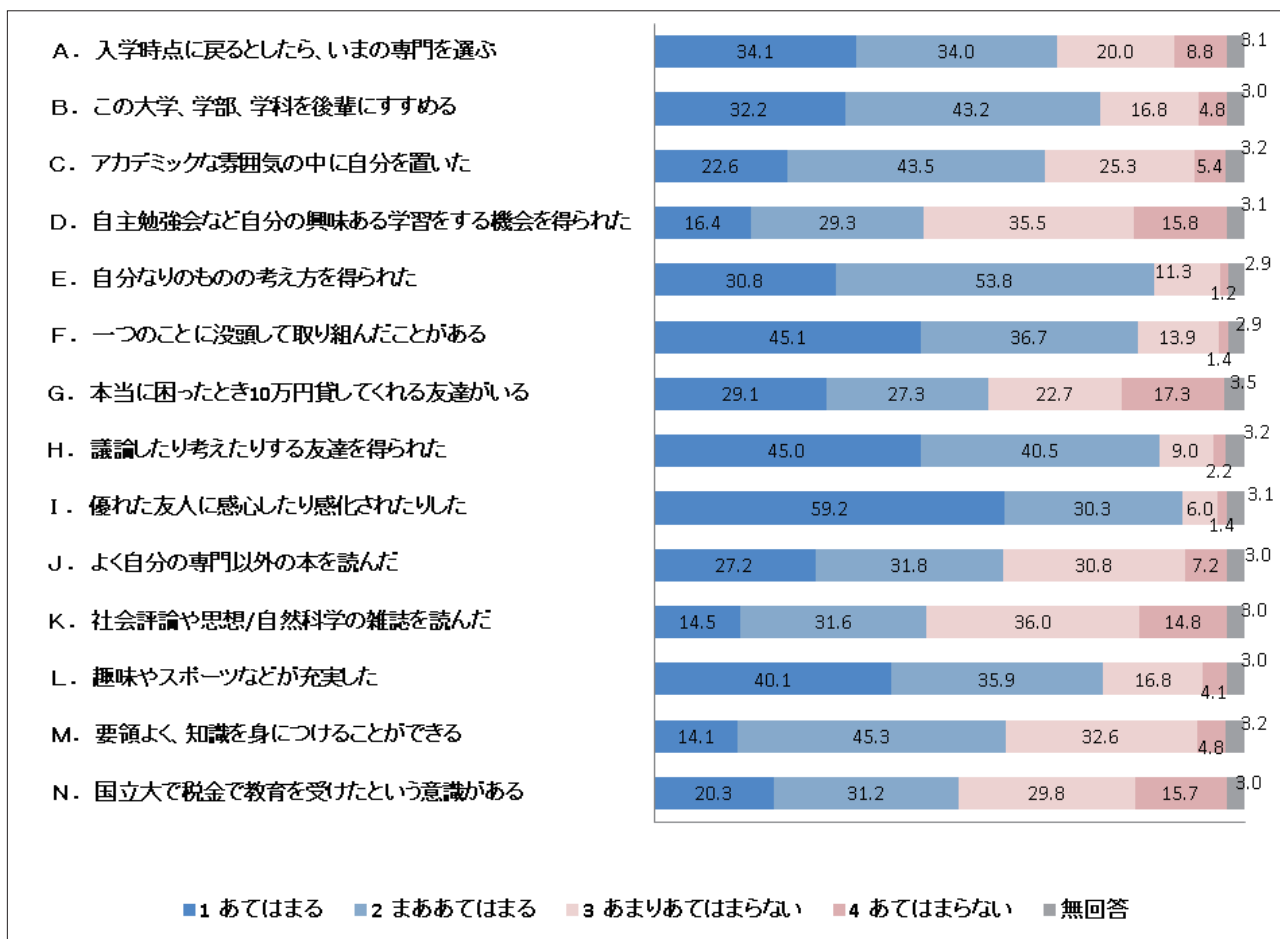


「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」に「あてはまる」+「まああてはまる」と回答した割合は80.6%にのぼる。また、「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」についても同様に81.4%となっており、教員に対する学生の評価は高いとみてよい。

「C. TA (ティーチング・アシスタント) が機能していた」については、機能していると答えた学生は、45.4%であった。

「優れた友人に感心した」・「議論したり考えたりする友達を得た」・「自分なりのものの考え方を習得」：約 90%

Q. 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。



学生が優れた友人と出会う経験が多いということが東京大学の学習環境の一つの特徴といえるだろう。本年度もこのことが浮き彫りとなった。「I. 優れた友人に感心したり感化されたり」といった経験をした者が「あてはまる」で 59.2%となり、「あてはまる」+「まああてはまる」では、実に 89.5%にのぼる。

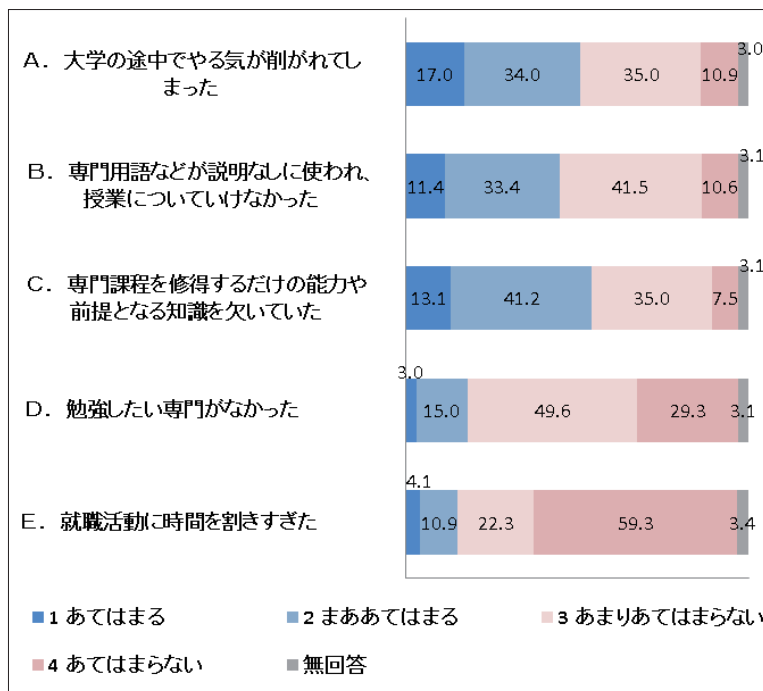
また、「H. 議論したり考えたりする友達」も「あてはまる」+「まああてはまる」をあわせると 85.5%となった。「G. 10万円貸してくれる友達」という項目は、困ったときに助けてもらえるという感覚をたずねたものであるが、56.4%となった。

このような環境のなかで、84.6%の学生が「E. 自分なりのものの考え方」を習得したと答え、また、「F. 一つのことについて没頭した」という経験も 81.8%にのぼるなど、豊かな学習経験という面でも高い数値がみられた。

大学時代の経験：約半数の学生が「大学の途中でやる気が削がれてしまった」

「就職活動に時間を割きすぎた」学生が 15%

Q. あなたは、大学時代につきのような経験がありましたか。



「A. 大学の途中でやる気が削がれてしまった」について、「あてはまる」と回答した学生は 17.0%、「まああてはまる」と合わせると、51.0%となり、肯定的な回答をした学生の割合が半分以上になる。

また、「B. 専門用語などが説明なしに使われ、授業についていけなかった」と「C. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」の二つの項目についての回答は、「あてはまる」で、それぞれ 11.4%、13.1%であり、「まああてはまる」とあわせると、それぞれ、44.8%、54.3%に達している。

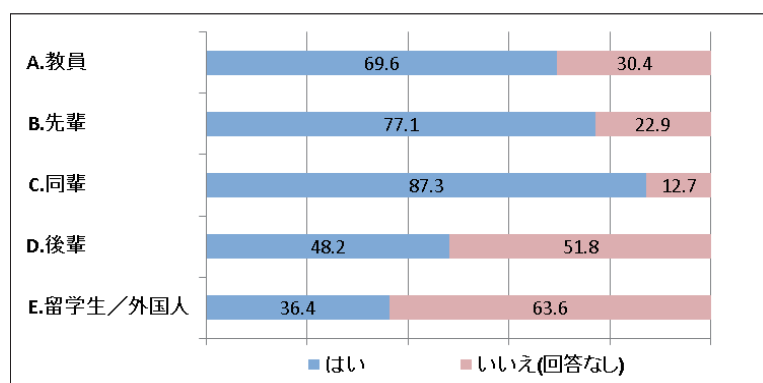
その一方、「D. 勉強したい専門がなかった」について、「あてはまる」との回答

はわずか 3.0%で、「まああてはまる」とあわせても、18.0%にとどまっている。また「E. 就職活動に時間を割きすぎた」について、「あてはまる」と回答した学生は 4.1%にすぎず、「まああてはまる」と合わせて、15.0%となっている。

教員との学問的交流は、約 70% の学生が体験

後輩とは半数以下にとどまる

Q. 次のような人と学問的な交流がありましたか。

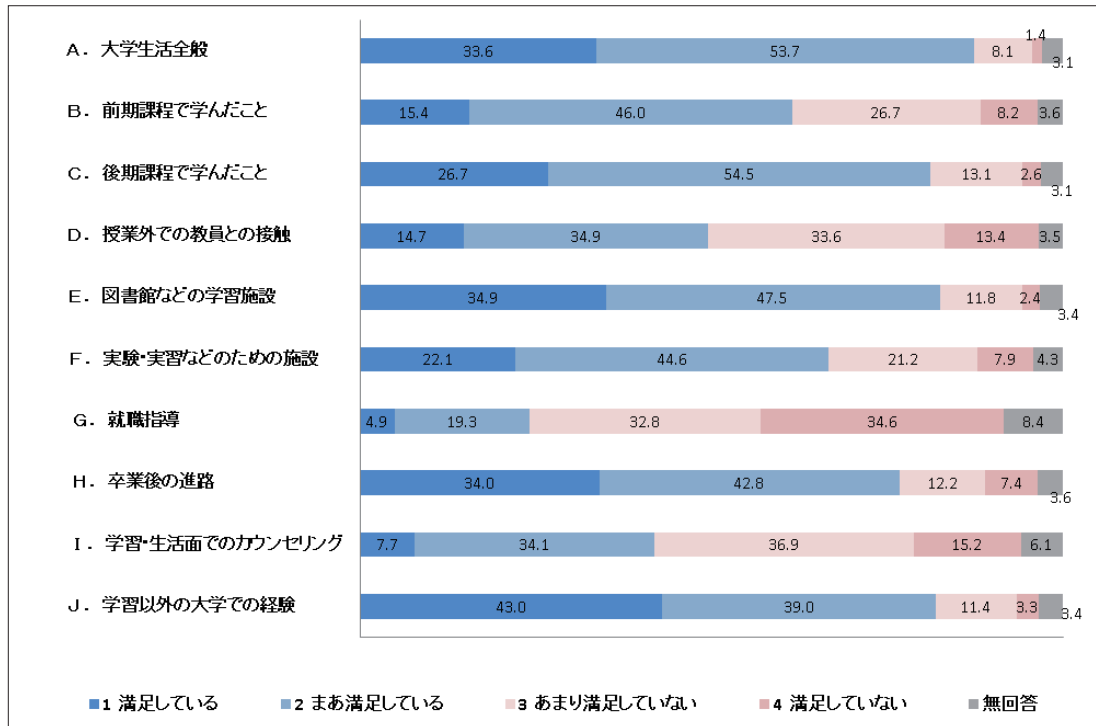


学問的な交流のあり方についてみていくと、69.6%の学生が教員との交流があったと答えている。教員よりも先輩との交流の方が 77.1%と若干高くなる。先輩との繋がりが機能していることがわかる。

同輩との学問的な交流機会では、87.3%の学生が交流があったと答えている。その一方、後輩とは 48.2%にとどまる。また、留学生、外国人との学問的交流は、36.4%となっている。つまり、外国人と学問的な交流をする機会はまだそれほど整っていないとみるべきだろう。

**満足度：約90%が満足 前期課程より後期課程のほうが満足度が高い
就職指導への満足度は低いが、卒業後の進路についての満足度は高い**

Q. あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きます。



「A. 大学生生活全般」について、「満足している」(33.6%)と「まあ満足している」(53.7%)と回答した学生の割合は87.3%に達している。教育に関しては、「B. 前期課程で学んだこと」と「C. 後期課程で学んだこと」の項目で、「満足している」+「まあ満足している」と回答した割合は、それぞれ61.4%、81.2%となっている。前期課程より後期課程の教育の方が満足度は高い。

「D. 授業外での教員との接触」について、「満足している」と回答する割合は14.7%で、「まあ満足している」(34.9%)とあわせて、49.6%となっており、A～Cにくらべてやや低い。「E. 図書館などの学習施設」と「F. 実験・実習などのための施設」に対する満足度は比較的に高く、「満足している」+「まあ満足している」と回答する割合は、それぞれ82.4%、66.7%となっている。

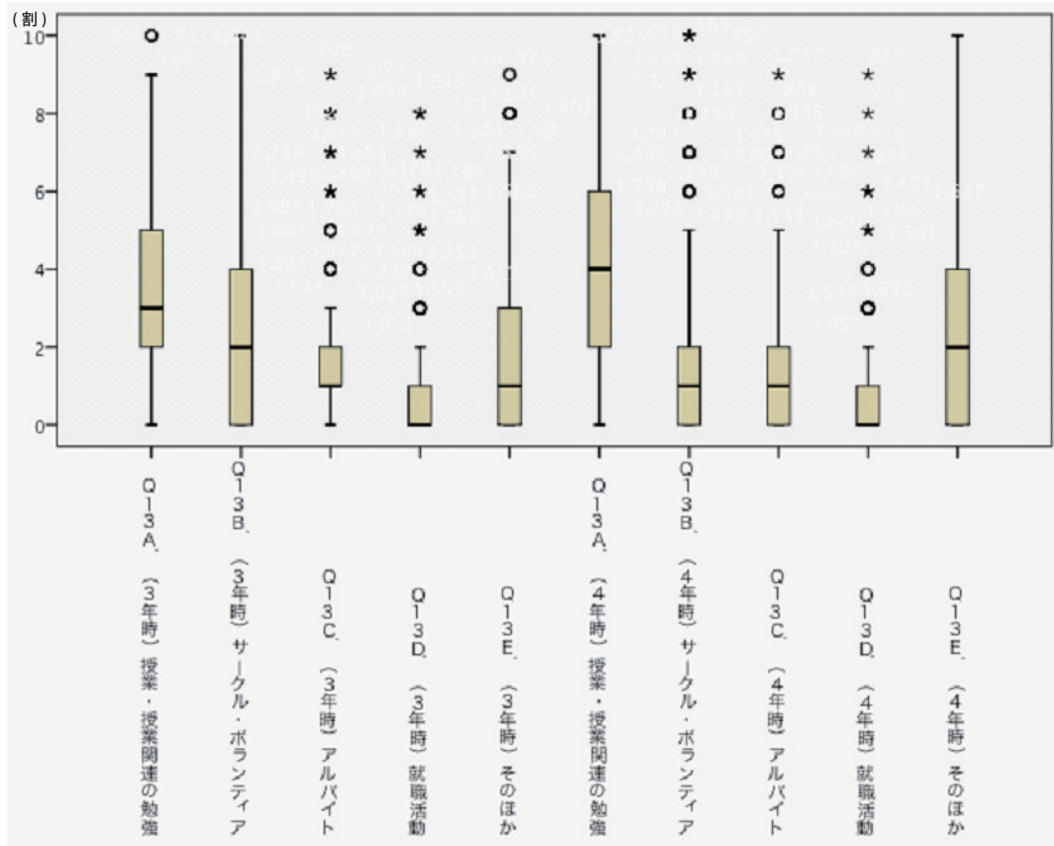
「G. 就職指導」に対して、「満足している」との回答はわずか4.9%で、「まあ満足している」(19.3%)とあわせて、24.2%にすぎない。しかし、逆に、「H. 卒業後の進路」には、「満足している」と回答した割合は34.0%、「まあ満足している」の割合は42.8%で、両者あわせると、76.8%に達している。しかし、この回答者の中には、卒業後、大学院に進学する者も含まれていることに留意すべきである。

「I. 学習・生活面でのカウンセリング」については、「満足している」との回答は7.7%で「まあ満足している」(34.1%)と、あわせて41.8%となっており、満足度が高いとはいえない。これに対して、「J. 学習以外の大学での経験」について、「満足している」(43.0%)と「まあ満足している」(39.0%)と回答した者の割合は、82.0%に達している。

時間配分：授業・授業関連の勉強に力を入れている

4年生でさらにその傾向は強まる

Q. あなたは、次のような項目に、時間をどのように配分していましたか（四年制課程のみ集計）。



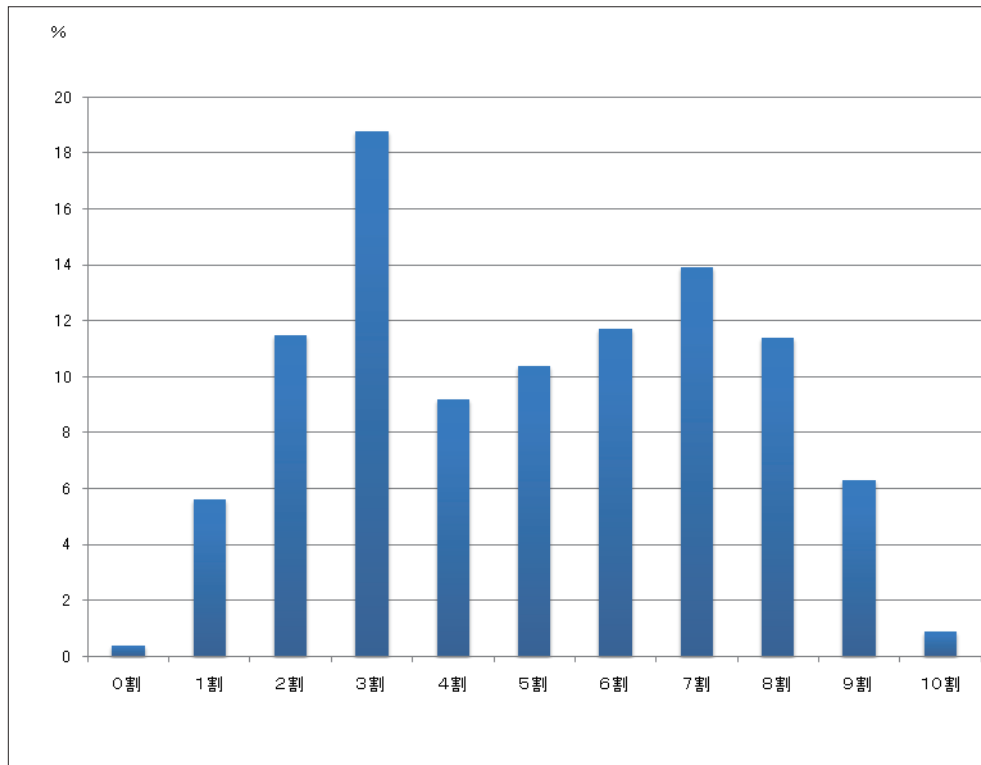
箱ひげ図：中央の太線は中央値、箱の中に50%が収まる（箱の上端が第1四分位点、下端が第3四分位点）。
○および*は外れ値。

授業、サークル、アルバイト、就職活動等にどのくらいの時間を割いたかを割合でたずねた質問である（3年時、4年時の各年時ごとにA～Eを合計すると10割になるように、各項目への時間配分を回答してもらった）。箱ひげ図をみると3年時においても4年時においても、「A. 授業・授業関連の勉強」に最も力を入れていることがわかる。平均をみると3年時には3.5割となるが、4年時には4.5割に増える。ただし、4年時には、分散もまた大きくなり、力を入れて勉強している学生とそこそこの学生の差が大きくなっている。

3年時にはサークル・ボランティア活動の比重も高い。3年時の図をみると、授業・勉強との「箱」の部分の重なりが比較的大きいことがわかる。それに対して4年時には、中央値が低下するとともに、勉強との間の「箱」の重なりが小さくなっていることがわかる。4年生では、勉強へのシフトが起きていることがみてとれる。

成績は、ばらついている

Q. あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。



(注) 無回答 (8.0%) を除く割合

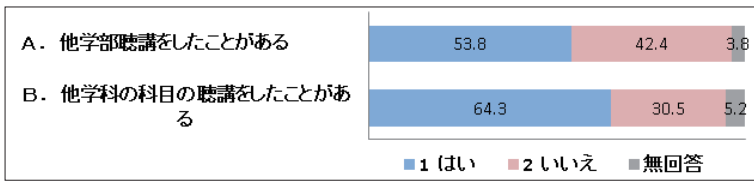
優の割合をみると、中央で山ができる正規分布状に分布しているというよりも、双峰型に分布しているとみることができる。3割と7割のところに山があり、4割のところは谷となっている。

なぜ2つの山になっているか興味深い、今後の検討課題である。

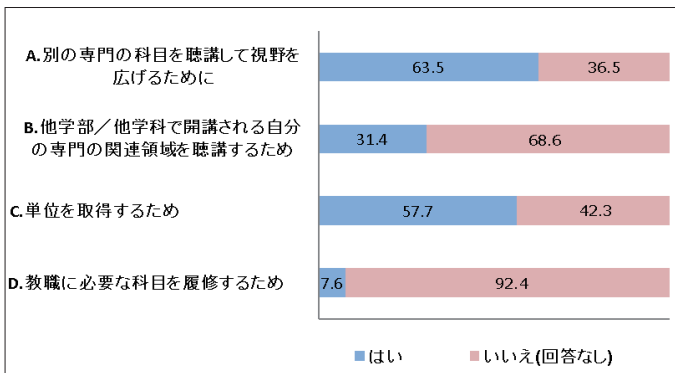
他学部聴講の経験者は過半数

視野を広げるための聴講が約 3 分の 2

Q. 他学部聴講についてお聞きします。



Q. どういう意図で聴講しましたか(他学部聴講をしている者のみ)。



他学部聴講の経験率は、53.8%と過半数に達している。同じ学部の他学科の科目の聴講経験は、これよりも10.5ポイントほど高く、64.3%となる。

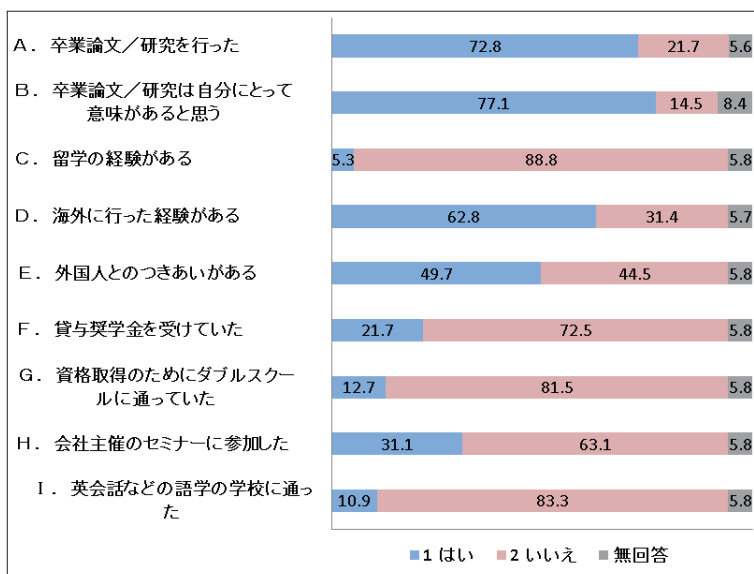
他学部聴講の理由は、「A. 別の専門の科目を聴講して視野を広げるため」が最も多く63.5%となる。これは他の学問領域への学生の関心にもとづく履修であるが、一方で「C. 単位を取得するため」という理由での聴講も57.7%にのぼっていることにも注意が必要である。

教職に必要な単位を取得するための履修は7.6%にとどまる。

卒業論文の意味を感じる学生は約 4 分の 3

ダブルスクールを経験した学生は約 10%

Q. 在学時の学習機会・経験についてお聞きします。



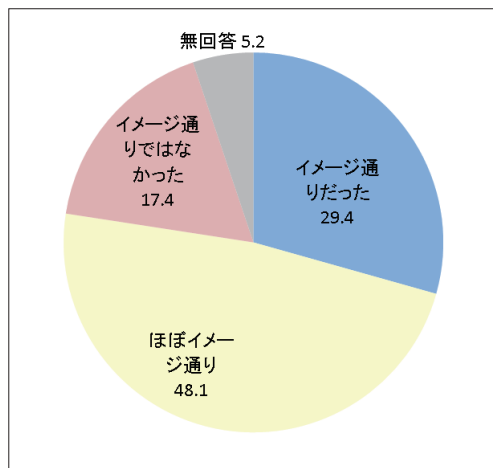
東京大学が提供する学習機会の中で高評価を得ているのが卒業論文/研究である。「B. 卒業論文/研究は自分にとって意味があると思う」と答えている学生は77.1%にのぼる。

海外経験・語学経験では、「E. 外国人とのつきあいがある」が49.7%であることから、外国人とコミュニケーションする機会を持つ学生も一定数いるとみてよい。しかしながら留学経験となると、5.3%にとどまる。

「G. 資格取得のためにダブルスクール」や「I. 英会話などの語学の学校」に通ったのは、それぞれ12.7%、10.9%となっている。

進学先がイメージ通りは約 4 分の 3

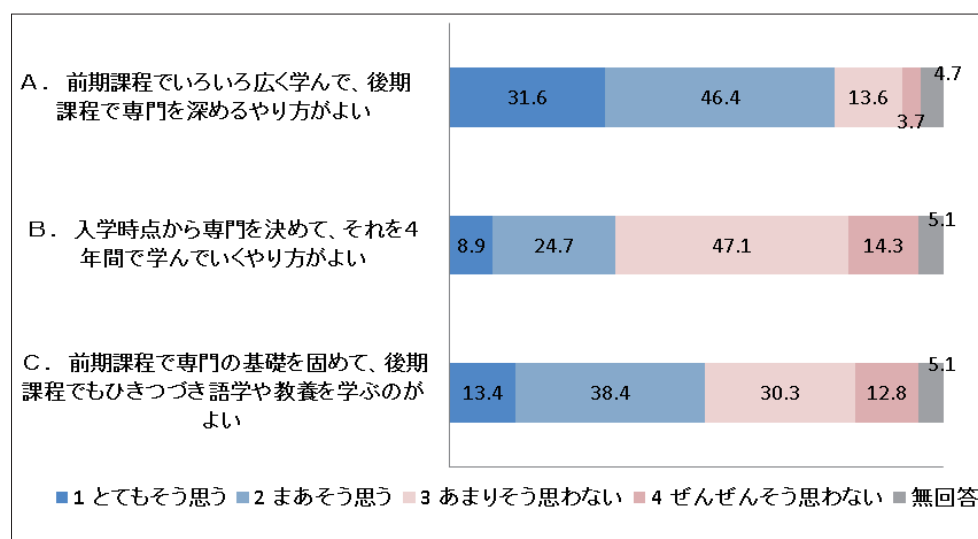
Q. 進学先は、進学前にイメージしていた通りでしたか。



進学先が、進学前にイメージしていた通りとする学生は、29.4%、「ほぼイメージ通り」とする学生は、48.1%で、あわせると 77.5%の学生がイメージ通りだったとしている。これに対して、イメージ通りではなかったとする学生は 17.4%で、イメージと現実の齟齬がある学生も一定の割合で存在している。

教養と専門の学習の仕方については、「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」という現行方式を評価する学生が 78%だが、後期課程で語学や教養も必要という学生も過半数

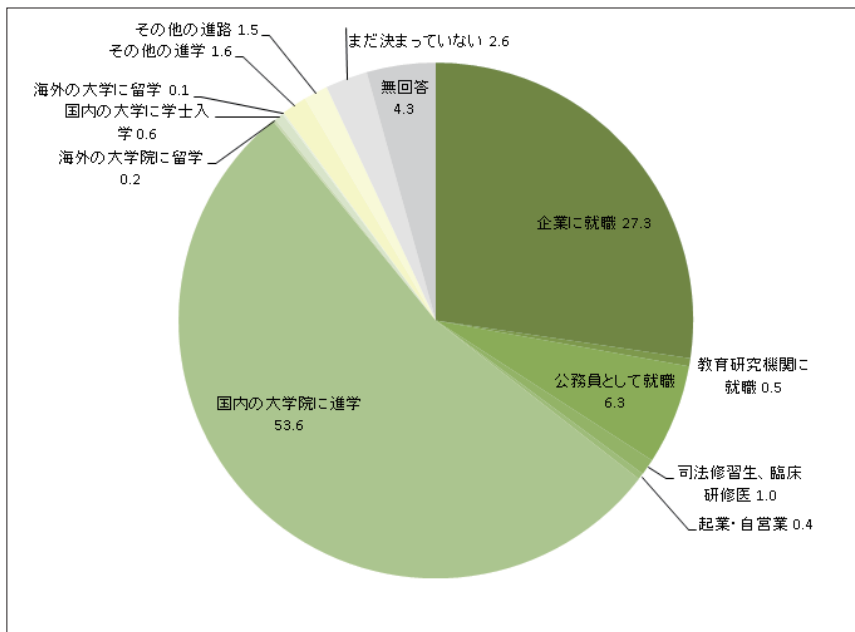
Q. 教養と専門の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。



東京大学の独自の教育方式である前期課程での教養教育と後期課程での専門教育の組み合わせについて、学生の評価をたずねた。現行方式である「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」について、「とてもそう思う」が 31.6%、「まあそう思う」が 46.4%で、あわせて 78.0%の学生が現行方式を評価している。これに対して、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という学生の割合は、33.6%にすぎず、レイト・スペシャリゼーション (late specialization) を評価する学生が 61.4%となっている。ただし、「C. 前期課程で専門の基礎を固めて、後期課程でも引き続き語学や教養を学ぶのがよい」という方式を評価する学生も 51.8%と過半数に達しており、東京大学の学士課程教育全体については、まだ検討する余地があると考えられる。

4月からの進路予定：過半数の学生が大学院に進学、企業への就職は約4分の1

Q. 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか



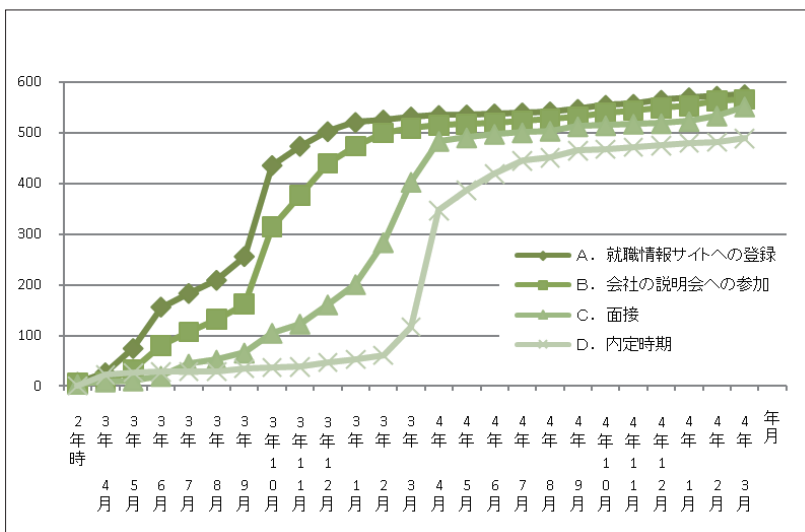
4月からの予定に関しては、「国内の大学院に進学」と回答した者の割合がもっとも高く、53.6%である。これは東京大学の特徴の一つである。続いて、「企業に就職」が27.3%であり、この両者をあわせれば、80.9%となっている。

残りの内訳は、「公務員として就職」6.3%、「その他の進学」と「その他の進路」がそれぞれ1.6%、1.5%、「司法修習生、臨床研修医」1.0%、「国内の大学に学士入学」0.6%、「教育研究機関

に就職」0.5%、「起業・自営業」0.4%、「海外の大学院に留学」0.1%である。このように、学生は卒業時、多数の学生は進路を決めており、「まだ決まっていない」(2.6%)とする学生はきわめて少数である。

早期化する就職活動：4年生の4月で3分の2が内定

Q. あなたは就職活動をいつから始め、いつ内定をもらいましたか。(民間企業への就職活動を行った人のみ)



※タテ軸は、その時期までに各項目のことがらを経験した人数(累積度数)
 ※進学者・無回答者を除いて集計した

グラフは、ある時期までに、どの程度の人が就職活動をはじめたのか、また最終的に内定をもらったのかを示している(累積度数)。どの項目においても曲線が急激に上昇する時期があり、その活動が本格化してきたことを示している。

3年生の5月くらいからサイトへの登録が始まり、9月～10月にピークをむかえる。会社の説明会への参加も、サイトの登録に追隨して本格化する。面接は、3年生

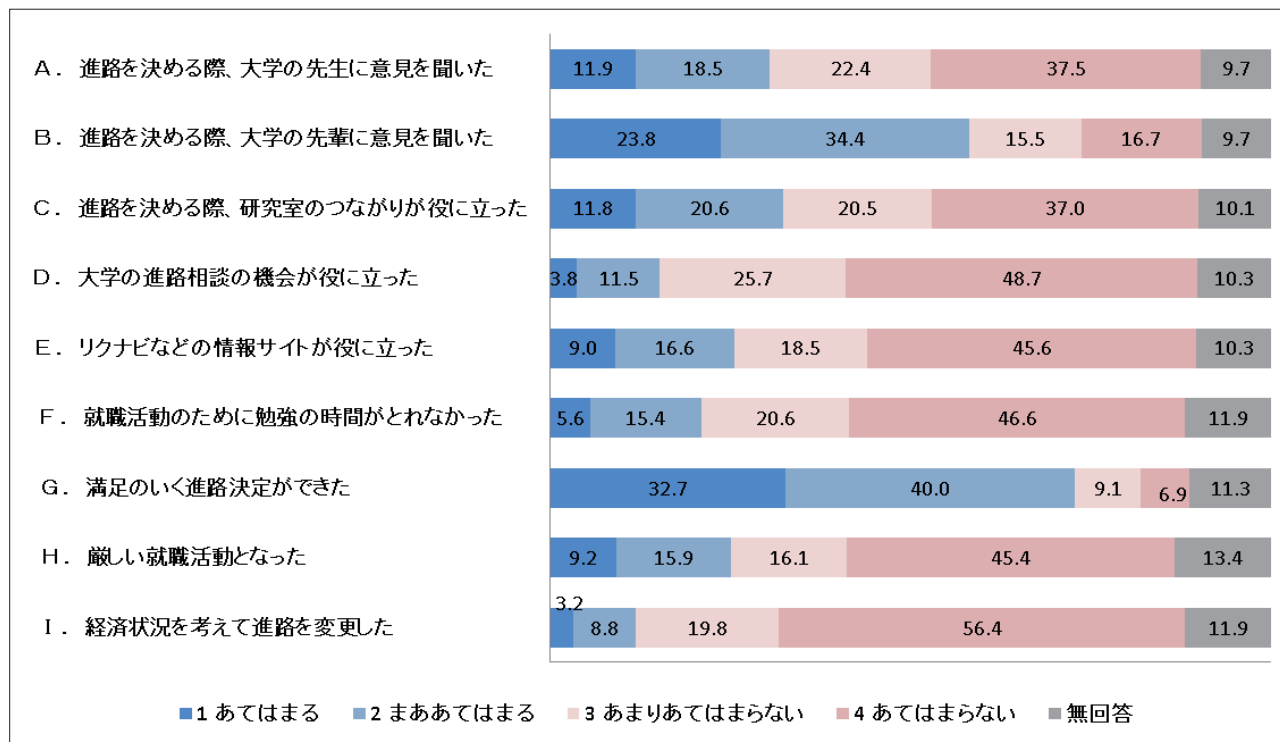
の1月くらいから本格化し始め、3年には92.4%の学生がこれを経験している。内定の線をみると、4年生の4月に一気に上昇している。60.2%が、この時期までに決まることになるが、5月以降も9月くらいまで漸増がみられる。それ以降は頭打ちとなっており、夏休みを過ぎると就職活動は難しい局面に入ること示している(あるいは、この時期までに進路変更を決めるケースもあることが考えられる)。

就職協定廃止以降、一般的にみられる動向ではあるが、就職活動は4年に入ってから本格化するのではなく、活動の中心は4年の5・6月以前にある。このことが、集計結果から再確認されたとみてよいだろう。

進路決定：「大学の先輩の意見」がもっとも重要

約4分の3の学生が「満足のいく進路決定ができた」と回答

Q. あなたの進路決定のプロセスについてお聞きします。



進路の決定のプロセスについては（A～E）、まず、全体の回答（合計）を見てみると、「あてはまる」と「まああてはまる」とあわせて、「B. 進路を決める際、大学の先輩に意見を聞いた」と回答する割合がもっとも高く、58.2%である。続いて、「A. 進路を決める際、大学の先生に意見を聞いた」が30.4%で、「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」が32.4%、「E. リクナビなどの情報サイトが役に立った」が25.6%となっている。「D. 大学の進路相談の機会が役に立った」との回答の割合は15.3%にとどまっている。

「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」について、「あてはまる」は5.6%で、「まああてはまる」(15.4%)とあわせれば、21.0%となっている。「G. 満足のいく進路決定ができた」について、「あてはまる」(32.7%)と「まああてはまる」(40.0%)をあわせると、72.7%に達している。「H. 厳しい就職活動となった」について、「あてはまる」は9.2%で、「まああてはまる」15.9%、両者をあわせて25.1%である。また、「I. 経済状況を考えて進路を変更した」では、「あてはまる」と「まああてはまる」をあわせると、12.0%という結果となっている。

連絡先：大学総合教育研究センター

メールアドレス：cerd@he.u-tokyo.ac.jp ホームページ：<http://www.he.u-tokyo.ac.jp/> 担当：小林